

過去完了形にみる感情的色彩

浜 口 瑛

This form represents a past action or state as completed at or before a certain past time :

これは Curme の *Syntax* に於ける Past Perfect に関する冒頭の一節である。

Curme をひきあいに出すまでもなく、大抵の文法家にとって、過去完了形を説明する場合時の基準を過去のある一点に求め、「その時までの動作若しくは状態の完了」を中心として説き起こし、所謂「現在完了形に準ずる用法」を述べ「前過去としての用法」をとりあげ、時により Narration, Mood に属する用法を含める程度でその説明をきりあげるのが常道である。

このような傾向が、過去完了形を比較的問題の少ない表現形式として印象づける結果を招いていることは否定出来ない。

ところが事実はどうであろう。文法家のたてる常識的な方程式ではどうても満足な解答が得られない過去完了形の用法に直面することは多少とも語法に関心をもつ者なら、しばしば経験するところである。

その一つに、文中に於いて「時の基準」とは全く無関係に姿をあらわす過去完了形の用法がある。

本稿では、従来とかく看過され勝ちであった、この云わば「過去形に代わり用いられる過去完了形」とその周辺に素朴なまなこを向け若干の考察

を試みることにする。

* * *

A.J. Cronin (1896—) の作品の中に “God’s Open Door” と題する自叙伝風の小品がある。

これは病気のため医師としての志を断たれた著者が、運命をのろいながら療養の地を求めて遙か West Highlands に旅立って行った当時の、作者自身の生活を綴った云わば若き日の「思い出の記」であるが、その中に次の一節がある。

Here time hung heavy upon my hands. Suddenly, out of the blue, I had an impulse to write. I began a novel, “Hatter’s Castle,” and I finished it, packed it up, and sent it to a publisher—who accepted it! Out of all reason, a door *had opened*. A new career lay before me.

問題は文中の a door had opened なる表現である。

所謂「時の関係を無視した過去完了形」の用法について、なんとか理論づけようとする試みがなされてきたことは事実であるが、明確な説明が困難であったためか「このような過去完了の用法は理解し難い」とさじを投げたり、或いは誤用と断定する学者も出る始末で¹ 現在に至るまで十分の納得を与える説明がなされていないと言って差支えない。

もっとも一方では、これを一種の省略と考え、They (or he, etc.) found (or thought, etc.) that を補って解釈する方法もあるにはある。

たとえばこの Cronin の場合、He found that a door had opened. の省略と解するわけであるが、このように説明困難な構文を直ちに「省略」と結びつけ片づけようとする方法は「問題の過去完了形」の場合に限らず、えてして表現構造の本質を見誤る危険を伴ない勝ちである。

筆者は、かつて、語法研究に際して一個の言語現象を構成観によるのみ解剖することの誤りを指摘し、例を「英語に於ける Number の問題」に

求めて、時には発想心理の面を合わせ見る必要を説いた²。

「この過去完了形」を考察するにあたって、かりに一步発想過程観に転身してみると、一つの手がかりが得られるのではないと思われるが果してどうであろうか。

今試みに、例をそのまま前掲の Cronin の場合に求め、作者の発想心理と表現の結びつきを考えてみると、〔……衝動にかられるまま書き綴った小説が意外にも出版社によってとりあげられた……〕その驚きと喜びが、——who accepted it! という簡潔なセンテンス（dash と感嘆符の表現効果の見事さに注目されたい）となってあらわれ、これを運命の転機と受けとった時の感慨に作者の回想が移った結果、次にくる文章が *Out of all reason, a door had opened.* と過去完了形で表現するに至ったとみる事が出来る。

つまり作者の脳裡に当時の感慨が大きな位置を占めたため「その時の自分の気持」を間接的に述べる結果を招いたと理解されるに至るのである。

一個の言語現象の成立には様々な要素がからみあっていることは当然で、この過去完了形の場合も例外ではないであろう。従って種々異った方向からの観察解剖が望ましいことは当然で、発想過程のみを辿って軽々しく結論を下すことは避けるべきであろうが、こと「この種の過去完了形」に関しては、話者ないし作者の主観的感情がその成因となる場合が大半とみて先ず大きな誤りはないであろう。

このようにみえてくると Jespersen の “The pluperfect is used in a peculiarly vivid way for simple past time”³ なる見解に対して特別何の不自然感をもつこともなくなるであろうし、又 Sweet の “The pluperfect is more graphic than the preterite”⁴ なる説明にも十分の理解と納得をもって接し得るに至るのである。

今 Cronin の一例から「過去形に代り用いられる過去完了形」に感情的色彩⁵を感じとったわけであるが以下、いくつか例をあげその実態を観察

してみることにする。

Many a day I had suffered hunger because I durst not spend the few coins I possessed; the food I could buy was in any case unsatisfactory, unvaried. But here Nature *had given* me a feast, which seemed delicious, and I *had eaten* all I wanted. The wonder held me for a long time, and to this day I can recall it, understand it.

これは G.Gissing の “The Private Papers of Henry Ryecroft” の一部 *Autumn* 中の一節である。

文中 Nature had given me a feast, ……, and I had eaten all I wanted. と連続して過去完了形を用いているが、これも前後関係からみて、常識的な過去完了の定義で割り切ることは困難と思われる。

作者 Gissing は我国では特に親しまれている作家の一人であり、この “Private Papers” は数ある英語教材の中でも、云わば一種の「古典的存在」となっているだけに、この作品に関する訳註書、翻訳書はかなり多い。ところが試みに、これらの註釈書にあたってみても（もちろん筆者の手許にある数種のものに限られるが）殆んどこの個所に触れているものは見当らず、邦訳を辿っても極めて平板な訳文にとどまっているのが普通である。つまり特に意識的に取扱っているものは見当らないのであるが、これも典型的な感情表現とみてよいと思われる。

若しかりにこれを内容が過去だからとして単なる過去形を重ねたとしたらどうであろう。

所謂「文法的」には極めてすっきりするかも知れない。けれども結果としては、如何にも叙述が平板なものとなり「生き生きとした印象」を与えるにはほど遠い「生命力を失った」表現になってしまうことは明かである。

前記 Cronin の場合と同じく、この場合も作者の感慨が時の観念を超越して一見不合理な完了時制と結びついたらとみて差支えないであろう。

次に Washington Irving (1783—1859) の “The Sketch Book” からその例

をひいてみよう。

筆者が例の *Rip Van Winckle* の中で問題の用法に気づいたのは相当以前のこと、それ以来機会ある毎に多くの訳註書にその説明を求めてきた。

(同作品に関する解説、訳註書は数的にみて前記 ‘Private Papers’ を遙かに上回る) もちろん、なんらかのヒントが与えられればとの気持があればこそ、あくこともなく註釈書を漁る結果となったのであるが、問題の個所を特にとりあげ解説を施しているのは中西(秀)教授の訳註「スケッチブック」(学燈社版 昭.28.)のみであった。

(この書は *Rip Van Winckle* を中心として他に二篇をとりあげたものに過ぎないが、原作者 Irving の解説をはじめ、作品構文の説明は細部にわたり、特に初学者には、親切な配慮が行届いた好著といえる。)

同教授の解説は「この種の過去完了形」を観察するにあたって、いくつかの問題を提示していると思われるので同書の解説を中心に検討を加えてみよう。

In a long ramble of the kind on a fine autumnal day, Rip *had* unconsciously *scrambled* to one of the highest parts of the Kaatskill mountains. He was after his favorite sport of squirrel shooting, and the still solitudes *had* *echoed* and *reëchoed* with the reports of his gun. Panting and fatigued, he threw himself, late in the afternoon, on a green knoll, covered with mountain herbage that crowned the brow of a precipice.

[過去完了形 *had scrambled* 及び *had echoed and reëchoed* は、次の *he threw himself* より一段前のことを示す。He was after his favorite sport が過去形であるのは、on that day he was after……の心持で、特に *threw himself* の前だけをいうのではない。] (解説原文のまま)

had scrambled 及び *had echoed and reëchoed* を、次の文中の *he threw himself* と関連づけ「前過去用法」とみておられるようであるが、*he threw himself* と直接関係をもっているのは、むしろ直前の *Panting and fatigued*, なる分詞句とみるべきであり、意味内容から考えてみても、前文の過去完了表現が後文(後続文ではない)の動詞の支配によるとみることが如何に

も不自然な感が免れない。ここで後文の *he threw himself* と関連づけられれば前文中の *He was after his favorite sport* なる過去形の説明が苦しくなるのは当然で（解説を参照されたい）この部分の説明が何かちぐはぐな印象を与えるのは、同書が相当の内容をもっていると思われるだけに惜しまれてならない。

私見によると、*Rip had unconsciously scrambled*……は *In a long ramble*……, という副詞句が先行しているものの、これは一種の所謂「物語の冒頭に来る過去完了形」⁶ とみるべきであり *the still solitudes had echoed and reëchoed* は理論的には当然 *the still solitudes echoed and reëchoed* と過去形で表現される場所であるが、この際過去完了形を用いているのは、明らかに主人公の感慨の投影とみることが出来る。即ち作者の心理が人物のそれと同化し、視点が自然に移動した結果必然的に生じた現象とみるべきで、*Rip* の感慨が *close up* された結果、時間的観念が第二義的なものとなり、時制の差異を生じたと解釈してよい。

この間、視点は作者と人物との間を動盪しているが、このような現象は作者がペンの勢いによって書き下ろすような場合、感情の高まりをおぼえた場合等に往々みられ（結果としてそのたび毎に読者の心理に微妙な変化の影を投げかけるものであるが）決して珍らしいものではない。

上掲の表現に主人公 *Rip* の一種の *sense of relief* と静寂の山境に銃声がこだまする爽快感を言外に感じとったとして決して不自然ではない。

正しく *Sweet* の云う「過去形よりも *more graphic* な印象を与える過去完了」（前出）の一例と解してよいであろう。

Irving を出したついでに同じ *Rip Van Winckle* から今一つの例をひいてみることにする。

Rip had but one question more to ask; but he put it with a faltering voice:

“Where’s your mother?”

“Oh, she too *had died* but a short time since; she broke a blood-vessel in a fit of passion at a New-England pedlar.”

これは Rip が20年間（彼にとってはほんの一夜のことに過ぎなかったが）山の中で眠った後、山を下り、すっかり変ってしまった田舎町の中で、一人の子の親となっていた自分の娘と再会するくだりである。

この *had died* について同書は [she too had died は she too died が正しい。過去完了形 *had died* を用いたのは、間接話法 the woman said that she too had died との混交である。] と説明している。

これは要するに一種の Intermediate Narration との見方にたつ説明と思われるが、この場合筆者としては次のように解釈したい。

即ち “Where’s your mother?” と尋ねた Rip の問の背後には当然自分の妻がまだ生きているという気持がある筈で、この間に対して娘が母親の死を単なる過去の出来事として答えられる余裕があれば She died a short time since. となるであろう。ところが父に先立され、母にも又ついこの間死なれてしまったという不幸にあった娘が、母親の死を客観的事実として述べるのが出来ないのは当然で、この場合当時の自分の悲しみに対する回想の念が時の観念に先行して時制に於ける文法的照応関係を破ったとみるべきがむしろ自然と思われるのであるが果してどうであろうか。

このようにみえてくると、この She too had died. は「おっかさんも死んじゃったんです……」というくらいの（悲しみ）（失望）の気持をあらわしている感情表現とみる事が出来る。

以上あげた *Rip Van Winckle* の二例からもうかがい知るように、「この種の過去完了形」を解剖する場合、外面的構成観にとらわれると、余りにも無理と思われる解釈にたたざるを得なくなり、正しい理解から遠ざかる結果を招くおそれがあることは常に留意する必要がある。

ここで構成観を云々したついでに、時制に於ける照応関係に大きな乱れ

をみせることなくそれでいて充分の感情的色彩を感じさせる過去完了形の例をとりあげてみることにする。

アメリカの舞台俳優 Eddie Cantor (1892—) が雑誌“*This Week*”に寄せたものに“*Slow Down*”と題する小品がある⁷。

(内容に関する前後の説明を省略する意味から全文を引用するが文中斜字体になっている四個所の過去完了表現に御注意頂ければ幸いである。)

As a young fellow, I was in a hurry to hit the top. Like a horse wearing blinders, I raced ahead seeing nothing but the finish line. My grandmother worried. “Don’t go so fast, son,” she’d say, “or you’ll miss the scenery.” I paid no attention. When a man knows where he’s going, why waste time getting there?

The years flew by. I had fame, financial security, and a devoted family. Why I wasn’t “the most happy fella” was beyond me. I raced on.

A Ziegfeld show in which I starred opened out of town. When the curtain fell, the applause was long, loud and beautiful. We had a hit. Backstage was charged with excitement. Somebody handed me a telegram. It was from Ida. ① Our fourth daughter *had been born*. Another of my children starting life without me. ② Natalie *had been* six months old before I even saw her. Suddenly, above the applause still ringing in my ears, I heard my grandmother’s voice, “Don’t go so fast, son, or you’ll miss the scenery.” ③ Oh, how much I *had missed*! The first faltering steps of my little girls; ④ the tears I *hadn’t wiped* away; the bright sayings, heard only from their mother over a phone.

I thought of friends collected, and then neglected; of my library, full of books with uncut pages; of vacations promised to my wife.

Ever since that “moment of truth,” despite a full schedule, I’ve made it a point to pause now and again to enjoy “the scenery.” Those pauses have become more important than any full schedule I ever had, because it’s not only the scenery you miss by going too fast—you also miss the sense of where you’re going and why.

①から④に至る過去完了形は夫々一応みな所謂「文法的」には説明がつ

くものである。

たとえば一見奇異にみえる③の Oh, how much I had missed! にしても、文中にみる“moment of truth”を時の基準とすれば容易に説明づけられる。その限りでは一見何の変哲もない又何の問題もない文章であることは確かである。

ところが、それだけで事足れりとして通り一べんの「読み」で済ますとすると結局はこの文における「人間感情の綾なす彩り」を見失ってしまうことになると思われるのであるがどうであろうか。

① Our fourth daughter had been born.

② Natalie had been six months old…….には、作者の「驚き」と「哀しさ」更には家庭を顧みることのなかつたことに対する「後悔」等々様々な感情が交錯する複雑な感慨がこめられていることを感じとり、

③の Oh, how much I had missed! には（失いしことが如何に大きいものであったかを考えた場合の）悔恨の情が、

④の the tears I hadn't wiped away. には強い「心残り」の気持が、夫々鮮やかに、表現されているとみるのは余りにも片寄った「受けとり方」ということになるであろうか。単なる過去形ではとうてい期待出来ない感情的色彩を夫々の完了形が示しているとみて誤りはないと思われるがどうであろう。

過去完了形は時に「過去の出来事」に対する回想表現に用いられ、vividな印象を与える効果を生むことは、以上とりあげてきたいいくつかの例を通して一応指摘し得るが、次にその目でみれば容易に理解し得る過去完了の用例を列挙して説明の補いとすることにしよう。

When she was nineteen her mother *had said* to her: "I wouldn't see too much of Edgar if I were you, darling……" —Maugham, *Up at the Villa*

Only last week Alice *had fallen* off her chair during the music after dinner at the Desmonds. —Bromfield, *Mrs. Parkinson*

When we reached home and *had settled* down a bit, and I *had seen* if everything looked the same as I was last there, Mother gave me a tiny new brother. It was a complete surprise and I *had wanted* one more than anything.

—*The Picnic Story Books*

“Whether we shall try again; you remember saying you would at the dance?” “Oh, I *had forgotten* that !”

—Hardy, *The Waiting Supper*

(最後の Hardy の例を除けば夫々過去の一点を示す adverb-phrase なり clause が付いているだけに「前過去用法」でないことは明らかで、回顧的表現とみて差支えない。)

いずれにせよ、過去完了形の用法には主観的感情を抜きにしては考えられない場合が決して少なくないことを常々念頭においておく必要があると思われる。

その意味から最後に今一つ Subjunctive Mood にみられる「過去形に代わる過去完了形」の場合をとりあげてみることにする。

細江逸記博士の「動詞叙法の研究」の中に、as if 構文の説明があるが数多くあげられた例文中に次の如きものがみられる。

Then with a yeo-heave-oh! and a chantey of the sailors,……they tossed the bags of sugar into the barge *as if* they *were* loaves of bread, and the casks of rum *as if* they *had been* pint pots. —Besant, *The Orange Girl*

「それから彼等は、よいとまけの掛声と船歌とに合わせて砂糖の大袋をまるでパンの塊の如くに、又ラム酒の樽を恰も一パイント入りの小壘の様に伝馬船に投げこむのであった。」(細江訳、原文のまま)

これは“Past Tense”+as if+ (“Past” Form+“Past Perfect” Form) という特異例として、「注意に値する」という但し書きつきであげられたものである。

as if-clause に於ける時制の問題は複雑多岐にわたるものであるだけに、

とうてい普通の条件文句に於けるが如き単純な考えでみることは許されない場合が多い。同博士も、この際はただ一つの言語現象としてのみとらえ、なんらの説明も加えていない。

これは問題が問題だけに至極当然といえはいる。

しかし一個の言語現象の成立には必ずなんらかの要因がある筈であり、故なくして起こり得るものではないと考えればこの場合も、「砂糖袋をまるでパンのように、(あの重い)酒樽を、それこそまるでポケット壘でもあるかの様に……」といった程度の強調の気持(もちろん意識の底には一種の驚きの感情が存在している)が *as if they were……* と *as if they had been……* の差異を生み出したと解してもそれ程不自然ではないと思われるがどうであろう。

若しこの推論が許されるならば、Jespersen が *If I had had the money [at the present moment] I should have paid you.* ([現在] お金を持っていれば貴方に支払うのだが) なる例をあげて説いた⁸ 問題の過去完了用法(通常過去の反事実を示す *Subjunctive Past Perfect* が時として現在をあらわす場合に用いられ、強意を示すと彼 Jespersen が説明している)も実は起るべくして起る自然な感情表現とみなされるに至るのである。

* * *

以上いくつかの例を通して観察してきたように「一見反文法的」にみえ「時として理解に苦しむが如き印象を与える」この種の過去完了用法も一度観点を換え、そのよって来る所以を考えてみると、そこには外面的矛盾を充分 *justify* する心理的論理が働いているのを知る。

繰り返す述べるまでもなく、語法研究に望まれることはあくまでも多角的な観察であり、避けなくてはならないのは一面のみにライトを当て全貌を云々する愚である。

本小稿に於いて筆者は「この過去完了」の用法を内面心理を中心に考察した。

これは従来とかく外面形態のみの観察にとどまる結果皮相の見解を下す

場合が多かったため片手落ちを防ぐ必要を感じたからに他ならない。

一応このような観点から「問題の過去完了」に接したとは云いながら、その説明たるや誠に不備、引用した例文も必ずしも適切とは思われない。

筆者とすれば内外諸家の見解を出来る限りたずね、整理し、そして筆者なりの批判を試みればよかった。

ところが「この過去完了形」に関する限り諸家の見解、先人の足跡を辿ろうにも辿りようがないのが現実で、勢い暗夜に手さぐりで坂道を歩む結果を招くこととなった。

或いは思い切って問題の提示のみにとどめ読者の御判断を待てばよかったのかも知れない。なまじ未熟な解明を、しかも粗雑なタッチで試みたばかりに益々問題を混乱させてしまったうらみがある。

不備不足をそのままに自ら浅学をさらけ出す愚を敢えてしたのは筆者自身に「この過去完了用法」に関する明確な説明を探し求める気持が強く働いていたからに他ならない。

大方の御教示を切に望む次第である。

(1966年8月)

注

1. *A Dictionary of English and American Usage* (開拓社版) p. 484
2. 亜細亜大学諸学紀要第8号
3. Jespersen, *Essentials of English Grammar* §23, 71
4. Sweet, *A New English Grammar* §2247
5. Onions, *An Advanced English Syntax* §134C にみる用語, emotional colouring
6. H. Saito, *Studies in Mood and Tense*, p. 51
7. 拙註 *A New Treasury of Words To Live By* (北星堂版) 参照
8. Jespersen, *Modern English Grammar* IV 9, 7 (9)

筆者は本学助教授、英語。